

カール・マルクス著　フリードリッヒ・エンゲルス編
『資本論』
「経済学批判」　・ヴィルヘルム・ヴォルフに捧ぐ

ヴィルヘルム・ヴォルフとは

選士（せんし＝選び抜かれた人）

- ・ マルクスとヴィルヘルム・ヴォルフが知り合ったのは 1846 年 4 月。マルクスとエンゲルスが共産主義通信委員会（通称ブリュッセル委員会）を設立した時である。（ブリュッセル委員会は発展的に解消し、1847 年に共産主義者同盟となる）
- ・ 1848 年マルクスはブリュッセルを追放され、パリへ。その後、ドイツに戻り、ケルンを拠点に「新ライン新聞」を発行する。
- ・ ヴィルヘルム・ヴォルフも危険をおかして、ドイツに帰国し、「新ライン新聞」の編集部に入り、ケルン労働者協会の指導も引き受けた。
- ・ やがて、マルクスはイギリスへの亡命を余儀なくされるが、ヴィルヘルム・ヴォルフも、1851 年にイギリスに亡命する。そして、ヴィルヘルム・ヴォルフは、1864 年、亡命地のマンチェスターで亡くなる。
- ・ マルクスのそばには、絶えず、ヴォルフがいた。

◎マルクスとヴィルヘルム・ヴォルフが知り合ったのは 1846 年 4 月だったが、以来、1846 年に、ヴォルフが死ぬまで、マルクスと行動をともにした。

◎エンゲルスが、マルクスを経済的に支えていたのは有名な話だが、ヴォルフも家庭教師をしながら、マルクスを経済的に支えていた。ヴォルフ自身が貧乏だったので、いつもというわけではないが、エンゲルスがマルクスの経済的支援要請を断った時、送金したとのこと。

文庫ぎんが堂「あらすじとイラストでわかる資本論」より

- ・ 何事も初めが難しい。この本も第 1 章、とくに商品の分析の部分が最大の障害になるだろう。
- ・ 例えば、1 個の生物を研究するより、その細胞を研究するほうが難しい。
- ・ 経済では、商品、または商品の価値が現れる姿がその細胞にあたる。
- ・ これを分析するには、顕微鏡の代わりに、抽象力が必要になる。
- ・ その分析は、いたずらに理屈をもてあそんでいるように見えるかもしれない。
- ・ しかし、細胞を分析することがあまりに細かいのと同じなだけだ。
- ・ この本は、価値の姿を説明する部分以外はとくに難しいとは思えない。
- ・ 私は、何か新しいことを学び、自分で考えようと志す読者を想定しているのだ。
- ・ 問題は、資本主義的生産様式の自然法則であり、これらは鉄の必然性をもって作用し、社

会を貫いている。

- ・ その純粋な発現にいちばん近い場所は、現在のところイギリスだ。だから、この本での探求には、おもにイギリスから例を取っている。
- ・ 産業的に遅れている国は、その未来の像をイギリスにみつける。
- ・ あらゆる社会は、遅かれ早かれ、この自然法則が発現する。
- ・ そして、遅れている社会は、この自然を取りのぞくことはできないし、飛びこえることもできない。
- ・ ただ、生みの苦しみを短くし、やわらげることはできる。
- ・ だから、一国民は、ほかの国から学ぶべきであるし、学ぶうる。
- ・ この本では、資本家や土地所有者の姿をけっしてバラ色で描いていない。この本での個人は、単に経済的な関係を示す役割であり、社会的な関係に責任があるものとしているのではない。
- ・ ここでは、社会構造の発展をあくまで科学的に、自然史的過程として分析しようとしているからだ。（ここで報告しているのは君のことなのだよ！）
- ・ マルクスは、冒頭から「この本は最初から難しいけど、できるだけ簡潔に書いたので我慢して読んでほしい」と忠告してくる。
- ・ 第1篇第1章には、売ることを目的として生産された商品の価値について書かれている。
- ・ この部分は『資本論』の中でも、とくに理論分析が複雑なところだ。
- ・ しかし、ここはいちばん基礎的な部分になるので、それを無視して先を読んでも、資本主義の法則を、本当の意味で理解しているわけではないことを示唆している。
- ・ 難しいとはいうものの、第1章は資本主義社会に生きている人間なら、誰もが日常的に関わっている部分。
- ・ みんなお金で商品を買っているのに、そこに含まれた意味に気づく人はいない。だからこそマルクスは、余計にそれを理解してほしいという意図で、このお金と商品に関する章を『資本論』の最初にもってきているのだ。
- ・ マルクスは『資本論』で分析している模範例をイギリスに置いたとっている。
- ・ 執筆当時のマルクスはイギリスに住んでおり、イギリスこそ資本主義が最も進んでいる国だと考えたからだ。
- ・ とはいえ、ここで書かれる話はイギリスに限らず、資本主義社会の国ならかならずたどる運命なので、心して読んでほしいとつけ加えている。
- ・ そして最後にマルクスは、批判したいのは資本家ではなく、資本主義の法則だと念を押ししている。
- ・ 批判の矛先が資本家に向いているような箇所もあるが、それは人格化した資本に向けた批判だというのだ。

- ・ ここで正直に描かれる資本主義社会の実態を知れば、不快な思いをする読者もいるかもしれないが、真実を知る勇気をもってみずからの道を進んでほしいという言葉で、序文を結んでいる。

第一版の序文（1867年7月25日）

遺漏（いろ＝手抜き、手落ち、大切なことが抜け落ちていること。）

通俗化（＝世間一般にわかりやすくすること。）

近似的（＝非常に似ていること。）

F. ラッサール（＝ドイツ・プロイセンの法学、哲学、政治学者。ドイツ社会民主党〈SPD〉の母体となる全ドイツ労働者総同盟の創設者。）

シュルツェ＝デーリッチ（＝ドイツの経済学者。プロイセン議会の左派に属した。世界初の信用協同組合を設立した。労働者や職員の調査を行う委員会の議長を務めているうちに、零細商工業者が資本家に対して地位を守り抜く上での協同の必要性を痛感した。）

交易（こうえき＝商品交換、貿易、貨幣を用いない物々交換。）

混濁（こんたく＝まじって、にごること。）

攪乱（かくらん＝かきみだすこと、混乱を起さるようにつること。）

兆候（ちょうこう＝前触れ、しるし、気配。）

青書（せいしょ＝国際情勢、外交政策を国が報告したもの。）

見紛う（みまがう＝見まちがえる。）

胸奥（きょうおう＝心の奥底）

畢竟（ひっきょう＝結局は。）

パリサイ派（＝前2世紀直後から紀元1世紀にかけて存在したユダヤ教の一派。政治闘争にはかかわらず、死後の応報、肉身のよみがえりを信じ、自由意志と予定の結合を唱え、キリストの教説に反対した。律法を厳格に守り、忠実に実行することにより、神の正義の実現を追求した。形式主義。偽善者。）

精髓（せいずい＝一番すぐれているところ、最も大切な部分）

- ・ この著作は、1859年の「経済学批判」の続きである。この著作の提供までの間には、永年の病気で中断がいく度あった。
- ・ 「経済学批判」の内容は、第一巻第一章に要約し、叙述を改善した。
- ・ 価値理論と貨幣理論の歴史に関する諸説は全部除いた。（第一章の注に、これらの理論の歴史に対する資料をつけた。）
- ・ 何事も初めがむずかしい。
- ・ 第一章の商品の分析を含む節が特にむずかしいので、価値実体と価値の大いさとの分析は、できるだけ通俗化した。（F.ラッサールのシュルツェ＝デーリッチを批判した書の一節は、

誤解を含んでいるので、通俗化が必要であった。)

- ・ 貨幣形態に見せている価値形態は内容に乏しく、単純である。2000年以上、解明に失敗したが、近似的には成功している。生態研究は、生体細胞を研究するよりやさしい。
- ・ 経済的諸形態の分析では、抽象力を用いる。
- ・ ブルジョア社会では、労働生産物の商品形態、または商品の価値形態は、経済における細胞形態である。顕微鏡的な解剖により、経済における細胞形態の細密な解剖を極めることができる。
- ・ 価値形態にかんする節を除けば、この書は難解ではない。
- ・ 私は、何か新しいことを学び、自分で考えようと志す者が、この書を読むのだと思っている。
- ・ この著作で探求しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、生産諸関係、交易諸関係である。
- ・ その典型的なのは、現在のイギリスである。
- ・ ドイツの読者が、イギリスの工業労働者や農業労働者の状態について偽善的・形式的な見方をしたり、あるいはドイツはそんなに悪化しないのだと、みずからをなぐさめるとするならば、私はこういう。「ここで報告しているのは（ドイツの読者である）君のことなのだ」と。
- ・ 問題は、社会的敵対関係の発展程度の高低ではない。法則そのもの自体、必然的作用、傾向なのである。
- ・ 産業発達国が、発達程度の低い国の未来像を示している。
- ・ ドイツはイギリスよりも状態は悪い。工場法が欠けているから。
- ・ 資本主義的な生産の未発達が、近代的窮迫とともに、前代から受けついで窮迫として、圧迫してくる。古くさい旧式の生産様式が、反時代的な、社会的・政治的諸関係の付随物を伴って残っていることから生じるのである。【死者が生者をとらえている。】
- ・ ドイツの社会統計は、イギリスと比べると貧弱である。イギリスと同等の調査・報告がなされるなら、ドイツのそれは驚愕すべき状態だろう。
- ・ 18世紀のアメリカ独立戦争がヨーロッパの中産階級に対して警鐘を打ったように、19世紀のアメリカの内乱はヨーロッパの労働者階級に対して警鐘を打ちならしている。
- ・ イギリスでは、変革過程が具体的になっている。それは、大陸へ衝撃となって帰ってくる。労働者階級の使命は、法的撤去の障害を除去することである。このため、この著書では、イギリスの工場立法の歴史・内容・結果を叙述した。
- ・ 近代社会の経済的運動法則を鮮明化することが究極目的である。
- ・ 資本家や土地所有者の姿をバラ色に描いてはいない。
- ・ 個人は、経済的範ちゅうの人格化であり、階級関係と階級利害の担い手であるかぎりにお

いて問題となる。経済的な社会構造の発展を自然史的過程として理解するものであり、個人を社会的諸関係において責任あるものとするものではない。

- ・ 経済学の特質として、私利を徴発する。最近の青書は、大陸の諸国の資本と労働の諸関係の変化がイギリスと同様になっていると述べている。アメリカでは奴隷制撤廃の後、資本諸関係と土地所有諸関係に変化があらわれようとしていると述べている。
- ・ これが、時代の徴候である。それは、支配階級のうちにおいてすら、現在の社会が変化しうるもので、不断に変転の過程をたどっていることを示している。
- ・ 本書の第二巻は資本の流通過程（第二冊）と、総過程の形成（第三冊）、第三巻は理論の歴史（第四冊）となる予定である。
- ・ 科学的な批判なら、どんな批評でも歓迎する。世論というものにも譲歩はしない。しかし、その偏見に対しては次の格言のとおりである。「汝の道を行け、そして人々の語るにまかせよ！」

第二版の後書（1873年1月24日）

- ・ 第二版での変更。各篇を見渡しすいように分けた。追記の注は第二版注と明記した。
- ・ 第一章第一節、価値の導き出しについては、交換価値が表現される方程式の分析を通して実施した。
- ・ 価値実体と、社会的に必要な労働時間による価値の大いさの規定との関連について、強調した。
- ・ 第一章第三節（価値形態）は書き改めた。
- ・ 第一章最後の節「商品の物神的性格云々」は大部分書き改めた。
- ・ 第三章第一節（価値の尺度）については、「経済学批判」の論述を参照するようにとしていたが、訂正し加筆した。
- ・ 第七章第二節には変更を加えた。
- ・ ところどころ本文の文体上の変更を加えた。
- ・ この第二版に対して、深入りした訂正や、比較的大きな文体上の訂正、見落とした誤りを細心に除くというような時間がなかった。
- ・ 1871年秋に、翌年1月に第二版の印刷を始めなければならないことを知らされたからである。しかも、この時、他の緊急な仕事のまっ最中であった。
- ・ 『資本論』は、急速に、広い範囲のドイツ労働者階級の中に理解を得ている。これは最良の酬いである。
- ・ ある工場主は、「ドイツ人の理論的感覚が知的階級から全く失われたのに反して、ドイツ労働者階級の中に新たに燃え上がっている」と評した。
- ・ ドイツにおいては、経済学は今日まで外国の学問であった。生きた地盤がなかった。イギ

リス、フランスから輸入された他国の理論的表現、学説集への転化、曲解であった。

- ・ 1848 年以来、資本主義的生産は、ドイツにおいて発展した。
- ・ 経済学が最後の形として理解され、科学とされた。
- ・ イギリスの例では、古典的経済学の時期にあっている。その最後の代表者、リカードは、階級利害の対立＝労働賃金と利潤、利潤と地代との対立を、社会的自然法則と考え、跳躍点とした。ブルジョア的経済科学は限界に達したのだ。
- ・ これに対する形で、シスモンディが批判してきた。
- ・ 1820～1830 年の時代には、リカード理論の俗流化と普及の時期であり、古い学派との闘争の時期であった。
- ・ 一方において、大工業自身は、大工業が 1825 年の恐慌とともに、周期的循環を開始している。
- ・ 他方において、資本と労働の間の階級闘争は、封建貴族に対するブルジョアジーを先頭とする国民大衆の争闘と、貴族的土地所有に対する産業資本の闘いにより、まだ、背後にかくれていた。
- ・ 1830 年以後、ブルジョア階級は、フランス、イギリスでは、政治的権力を掌握していた。
- ・ 工場主の代表を先頭にした穀物条例反対同盟の動き、自由貿易立法の動きがあった。
- ・ 1848 年大陸の革命（フランス、2 月革命）はイギリスにも衝撃を与えた。
- ・ ジョン・ステュアート・ミルが代表されるような、混合主義が現れた。「ブルジョア的」経済学の破産宣告である。
- ・ ドイツのプロレタリア階級は、すでに、ドイツのブルジョア階級より、理論的階級意識をもっていた。
- ・ このような事情のもと、ブルジョア経済学は、パステリアを代表する群れに集るか、ジョン・ステュアート・ミルに追従するかであった。いずれも、独創的な進展はなかった。
- ・ しかし、プロレタリアート階級のその批判は、進展している。ドイツブルジョア階級の代表者、代弁者は、『資本論』を黙殺しようとしたが、そうもいかなくなり批判等を書いたが、労働者新聞に反批判が示され、それに対する反論すらできていないのだ。
- ・ 『資本論』ロシア語訳は、1872 年、3000 部刊行され、品切れとなった。1871 年キエフ大学 N.ジューベル経済学教授は、私の理論がスミス＝リカードの学説の必然的発展であることを証明した。
- ・ パリの『実証主義評論』は私に対して、形而上学的に取扱い単に批判的分析に限られていると非難している。これに対して、ジューベル教授は、「マルクスの方法は、全イギリスの学派の演繹的方法である」とのべている。また、「マルクスは分析的思想家である。」とのべている者もいる。
- ・ ドイツの批評家たちは、ヘーゲル的詭弁について叫びちらしている。私の研究方法を實在

論的であるが、叙述の方法はドイツ的弁証法だとのべている。「マルクスは諸現象の法則を発見することを重視している。社会の運動を自然史的過程として考察する。理念ではなく、外的現象だけだ。経済生活の一般的諸法則は同一のものということ拒否する。マルクスは、人口法則が同一であることを否定する。生産力発展の程度が違うとともに、諸関係は変化し、これを規制する諸法則も変化するとしている。等々」

- ・ 私の弁証法的方法は、ヘーゲルの方法と根本的に相違している。理論的なものは、物質的なものが思考されるということである。私はヘーゲルの弟子であることを告白し、同時に、すでにヘーゲルを批判した。
- ・ 資本主義社会の矛盾に充ちた運動・周期的な景気循環をブルジョアは切実に感じている。その頂点が恐慌である。まだ先行の段階にあっても、ふたたび進行を始めているのだ。
- ・ 恐慌の普遍化、作用の強化は、ドイツの「成り上がり者ども」に弁証法をたたき込む。

フランス語版にたいする序文と後書

(1872年3月18日 モーリス・ラ・シャートルあての手紙)

- ・ 『資本論』のフランス語翻訳を分冊刊行する提案。労働者階級に理解されやすい方法と思う。反面、初めの諸章がむずかしいので、関連を先に識るため辛抱強く順に読まないだろう。
- ・ 「学問に、坦々たる大道はなく、学問の急峻な山路を登るのに、疲労困憊をいとわぬ者だけが、輝かしい絶頂をきわめる。」のだから。
(真理を求めるためには、最初から最後まで読め！)

読者に与う (1875年4月28日)

- ・ 精確な翻訳のために、私は、読者のためにわかりやすいよう字句を変えた。
- ・ 分冊での刊行もあり、周到さが集中されないことにより、文体の不統一となった。
- ・ しかし、このフランス語版にどんな文章上の欠陥があるにしても、これは、原本とは独立した一つの科学的な価値を持っている。
- ・ ドイツ語のできる(ドイツ語原本を読める)読者でも、フランス語版は手許においてもらいたいものだ。

第三版に (1883年11月7日 フリードリヒ・エンゲルス)

- ・ 1883年3月14日、この第三版を自分の手で印刷することができず、マルクスは死んだ。
- ・ 私には、この第三版と、手稿として遺された第二巻の刊行の義務が残された。
- ・ マルクスは第一巻の大部分の改定を目論んでいたが、彼の病気と第二巻の完稿の完成が、

これをはばんだ。

- ・ このため、この版は、必要などころの改訂と、フランス語版にある補足だけ加えるようにしたようである。
- ・ 遺稿には、ドイツ語版でのところどころの改訂と、フランス語版の参照の指示がある。
- ・ これらの変更と追加は、最後の部分の「資本の蓄積過程」の篇に限られている。
- ・ 文体について、マルクスはいくつかの章、節を、根本的に訂正していた。
- ・ 私は、追加と補足を、原文にできるだけ沿って（フランス語からドイツ語に）翻訳した。
- ・ この第三版では、マルクスが改訂しようとはっきりしているもの以外、一語とも変更していない。
- ・ 原文で用いられているイギリスの貨幣や度量衡を、新ドイツの等量に換算することは、許されていないと思い、していない。
- ・ マルクスの引用の仕方。他の経済学者の理論的意見の引用は、どこで、いつ、誰が、その経済思想を最初に語ったかということを確認するだけにとどめている。この経済上の観念が、その学問の歴史にとって重大であり、その時代の経済状態の妥当な理論的表現であるから。
- ・ 第二巻は、できれば、1884年のうちに刊行したい。

英語版の序文（1886年11月5日 フリードリヒ・エンゲルス）

- ・ 1883年、マルクスの死後まもなく、この著の英語版が必要だとされた。
- ・ ドクター・エイヴリングの翻訳
 1. 第十章（労働時間）および第十一章（剰余価値の率と量）
 2. 第六篇（労働賃金、第十九から二十二章を含む）
 3. 第二十四章のうち第四節（……する諸事情）から本巻のおわりまで、第二十四章の最後の部分、第二十五章および第八篇の全部（第二十六章から三十三章まで）を含んでいる。
 4. 著者の二つの序文
- ・ 本巻中の残余全部が、サミュエル・ムア氏による翻訳。
- ・ エンゲルスが、全篇に対して総責任をとった。
- ・ この翻訳の底本は、ドイツ語第三版である。1883年、マルクスの英訳のための指示の中の示された変更と一致している。
- ・ 同様に、フランス語版本文を、困難な個所で、参照した。
- ・ 古典派経済学は、生産物のこの不払部分（マルクスは剰余生産物と名づけた）を、総体において、全体的なものとしては研究しなかったため、その発生や性質、その価値の補足的分配を規制する諸法則について、理解に到達しなかった。同様に、一切の産業は、無差別

に、マニファクチャという表現で総括される。

- ・ このため、経済史の二つの大きな本質的に違った期間の区別はなくなってしまう。
 - ① 本来のマニファクチャ（手工労働による分業にもとづくもの）
 - ② 近代的工業（機械装置によるもの）
- ・ マルクスの引用法。大多数は、本文で提起された主張に対する文献的証拠という仕方。経済についての著書からの引用は、いつ、どこで、誰によって、見解が最初に語られたかを示している。引用された見解が、一定の時代に社会的生産と交換の諸条件を表現するものとして重要であるからである。
- ・ この第一巻は、それ自身として全体をなしている。この20年の永きにわたって、独立の著作と考えられた。
- ・ 1885年刊行の第二巻は、第三巻なしには不完全である。
- ・ 第三巻は1887年末を越えて公刊される。第三巻が刊行されて、その時、この両巻の英語版の準備が考慮される。
- ・ イギリスにおいても、マルクスの諸理論は強力な影響を与えている。
- ・ また、イギリスの経済状態の根本的な研究の必要が迫っている。1825年から1867年にいたる間、つねに繰り返された停滞、繁栄、過剰生産、および、恐慌という10年の循環は、そのコースを走り終えた。継続的、慢性的な不況という絶望の沼にいたった。「失業はどうする？」という問いに、誰一人答えることができない。その運命を、自分の手で決定する時点を算定できる。
- ・ このとき、マルクスの全理論を知りえるのだ。
- ・ イギリスが、平和的合法的手段で社会革命を遂行しうるのである。マルクスは付け加える。自分は、イギリスの支配階級が反逆しないで、この平和的合法的革命を甘受するだろうとは思わない、と。

第四版に（1890年6月25日 F・エンゲルス）

- ・ 本文、脚注を最終的に確定する。
- ・ フランス語版と、マルクスの書いた覚書とを比較し、フランス語版から若干の補足を採用した。
- ・ 若干の説明的補足注を加え、「D・H」[編集者]の印をつけた。
- ・ 英語版刊行に際しては、多数の引用文の完全改訂が必要となった。引用の文が英語の原文そのものである場合は、この原文を参考にする責務が私のもものとなった。厄介な訂正となったが、目立った変更はないと思う。
- ・ マルクスの引用の正しさを疑うものが、一例あった。

以下、略。